

エペソ人への手紙4章17-32節 「むなしい思いから離れた歩み」

1A 新たにする思い 17-24

1B 異邦人のむなしい思い 17-19

2B キリストにある教え 20-24

1C イエスにある真理 20-21

2C 人の着脱 22-24

2A 身に着けるべきこと 25-32

1B 新しい人 25-29

2B 聖霊にある優しさ 30-32

本文

エペソ人への手紙4章を開いてください、私たちは前回、4章の16節まで学びました。そこで私たちは、「召されたその召しにふさわしく歩みなさい。(1節)」という勧めを受けて、学んでいきました。キリスト者には、明確な召しがあります。生きている意味や目的、その目標があります。それは、キリストにあって一つになっていくことです。この方をかしらとして、成長していくことです。同じくキリストに捕えられた者たちが、一つになって仕え合っていくことについて、私たちは前回、学びました。こうした、はっきりとした召しがあって生きているのですが、あなたがたの周りでは、そのように生きていない、そのようにならないでほしいというのが、4章後半の勧めです。人間的に言うと、「人生を無駄に過ごす」ということです。

1A 新たにする思い 17-24

1B 異邦人のむなしい思い 17-19

¹⁷ ですから私は言います。主にあって厳かに勧めます。あなたがたはもはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。

パウロは、「異邦人」という言葉を使っていますが、これは、「異邦人にあるような、むなしい心」という意味合いで使っています。エペソの信者たちも、多くがユダヤ人ではなく、異邦人ですが、異邦人だからと言って、必ずしも、全てが、むなしい思いの中に生きているということではありません。「まことの神から遠く離れて生きている人々」という意味合いで使っています。現に、当時、ユダヤ教に改宗していなくとも、「神を敬う人」と呼ばれる人々がいました。また貴婦人と呼ばれる人々もいました。そういった人々は、異邦人ですが、異邦人の中にある慣わしや価値観には同意できず、イスラエルの神、天地創造の神に魅かれて、イスラエルの神を敬う人々のことです。例えば、コルネリウスは、そのような人でした。

使徒たちの教会に対する手紙、特にパウロの手紙には、福音書にはない勧めがあります。それが、これです。福音書、つまり、イエス・キリストが公生涯を地上で歩まれた記録においては、イエスご自身が、「イスラエルの失われた羊のために来た」と言われたように、イスラエル人に対する宣教のことが、主に書き記されています。ですから、ユダヤ人の間では、ほとんど問題になっていなかったことは、イエスご自身も語らなくてよかったのです。むしろ、偽善の問題がありました。あからさまな姦淫は行っていませんが、心の中で女を見て情欲を抱くであるとか、簡単に離婚してしまうであるとか、そういった問題をイエス様は主に取り扱っておられます。そして、あからさまに罪を犯しているユダヤ人たちは、悔い改めて、イエス様について行く人々が出て来て、イエス様はそういった人々を食事もされました。

しかし、当時の異邦人の世界、ギリシアの文化があり、ローマの社会に生きていた人々は、まるで違う世界で生きていました。ギリシア神話に基づく儀式があり、その神殿があり、そこでは、酩酊、狂乱状態、性的乱交、自傷行為、また祭司と称して、売春も行われていました。そして、ギリシア哲学など、為になるものはありますが、アテネで人々がただ新しいことを聞きに集まっている、アレオパゴスがあったように、余暇のようにして知的な議論を聞いていたのです。こういった中に、異邦人の信者たちは自分たちも一部になっていました。

ですから、使徒たちの働きは、キリストから学び、キリストに聞き、こういった歩みから離れることを教えていったのです。キリストを信じたと言っても、一方では、パウロの語る恵みの福音を曲解して、すべてが自由にされているのだからと言って、これらの歩みから離れない人々がいました。もう一方では、こういった異邦人の歩みから離れて守られるために、ユダヤ人たちがしているように律法主義に陥った者たちもいました。その両極端の中で、キリストにあってバランスを持って生きる、健全に生きる道を教えていたのです。

¹⁸ 彼らは知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、頑なな心のゆえに、神のいのちから遠く離れています。

17 節の、「むなしい心」という「心」は、ギリシア語では「思い」であります。ですから、ここで「知性」について話しています。パウロは、ロマ書でこのことを詳しく話していました。「1:19-21 神について知りうることは、彼らの間で明らかです。神が彼らに明らかにされたのです。神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」被造物に現れている、永遠の神、天地創造の神の栄光は、誰の目にも明らかです。それにも拘らず、心を頑なにしています。神について無知なのですが、その無知は情報において、知識において無知なのではなく、知ろうともしないという心の頑なさによって由来するものです。そのために、神のいのち

から遠く離れています。

¹⁹ 無感覚になった彼らは、好色に身を任せて、あらゆる不潔な行いを貪るようになっていきます。

無感覚について、詩篇 115 篇に、偶像を拝む者たちの姿が書かれています。「115:4-8 彼らの偶像は銀や金。人の手のわざにすぎない。5 口があっても語れず目があっても見えない。6 耳があっても聞こえず鼻があっても嗅げない。7 手があってもさわれず足があっても歩けない。喉があっても声をたてることができない。8 これを造る者も信頼する者もみなこれと同じ。」最後の、「みなこれと同じ」という言葉が大事です。偶像を拝めば、偶像は見えないし、聞こえないし、鼻でかくこともない、つまり無感覚なのだが、あなたがたも同じようになるということです。

自然の感覚があれば、決して行わないような不潔なことを平気で行っていると、パウロは言っています。婚前交渉、婚外交渉はもちろんのこと、略奪婚、乱交、同性愛行為、獣姦など、ありとあらゆることをやっていました。ヘロデ・アンティパスが、バプテスマのヨハネに、「あなたが兄弟の妻を自分のものにするのは、律法にかなっていない。」と責められました(マルコ 6:18)。ヘロディアは、ヘロデ・ピリポの妻でしたね。これは、ヘロデ・アンティパスは、ユダヤ教徒で会ったのにもかかわらず、ローマの影響を強く受けていて、略奪婚を平気で行っていたからです。

2B キリストにある教え 20-24

1C イエスにある真理 20-21

²⁰ しかしあなたがたは、キリストをそのように学んだのではありません。

「かしらなるキリストに向かって成長する(4:15)」者たちにとって、キリストを学ぶことは、人生そのものだと言えます。ここで、「キリストから学ぶ」ではなく、「キリストを学ぶ」とあることが重要です。午前礼拝でも学びましたが、私たちには、どのように歩めばよいかの前例がありません。イスラエルの神から離れては、旧約時代も、新約時代も、すべて偶像の神々であり、不潔な行いも伴っていました。しかし、神の本質が完全に現れたキリストは知っています。この方は教師であっただけでなく、この方自身が道であり、真理であり、いのちなのです。ご自身によって学ぶことを、次のように語られましたね。「マタ 11:29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。」

²¹ ただし、本当にあなたがたがキリストについて聞き、キリストにあって教えられているとすれば、です。真理はイエスにあるのですから。

先ほど話したように、異邦人が信者になっても、そこにある自由を歪めて放縦に走っていた者たちもいました。難しい言葉で、「無律法主義」と言います。律法主義の振り子が揺れすぎて、何をや

ってもよいという考えです。パウロは、ピリピ人への手紙でこのことを嘆いています。「3:18-19 というのは、私はたびたびあなたがたに言ってきたし、今も涙ながらに言うのですが、多くの人がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。19 その人たちの最後は滅びです。彼らは欲望を神とし、恥ずべきものを栄光として、地上のことだけを考える者たちです。」

イエス様が語られていた言葉を思い出してください、「聞く耳のある者は聞きなさい。(マルコ 4:9)」と言われました。種蒔きの喩えです。種を蒔いても、ある種は道端に落ち、ある種は岩地に落ち、ある種はいばらの生えている地に落ちました。そして、ある種は、良い地に落ちて、三十倍、六十倍、百倍の実が結ばれます。キリストについて聞き、キリストにあって教えられているとすれば、良い土地に落ちた種のように、実を結ばせることができます。聞く耳があるのかどうか、問題です。そのことを、パウロはここで言っています。

そして、「真理はイエスにあるのですから」と言っていますね。ギリシア哲学において、真理とは何かの議論がいろいろありました。総督ピラトに対してイエス様が、「わたしは、真理について証しするために生まれ、そのために世に来ました。」と言われましたが、ピラトは、「真理とは何なのか。」と聞きました。(ヨハネ 18:37-38)いろいろな人が、これが真理だとして議論していますから、ピラトはそういった議論に飽き飽きしていた、冷笑的になっていたのかもしれませんが。いろいろ真理と呼ばれるもおんがあっても、キリスト者にとっては、イエスにこそ真理があると知っています。この方に生きることこそが、真実な生き方だということです。

2C 人の着脱 22-24

²² その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、²³ また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、²⁴ 真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。

午前礼拝の説教でこの箇所を詳しく教えたので、ぜひそちらをお聴きください。キリストにあって、自分の霊が、神の御霊によって新たにされました。石のような固い心から、肉の心に変えられました。それに伴って、思いも変えられました。その働きは、神の御霊に導かれることによって、日々、新しくされています。そこには、神にかたどり造られた新しい人がいます。その新しい人を身に着けていくということです。その新しい人は、真理、すなわちイエス様にある義と聖に基づいています。ですから、キリストの似姿に変えられるのです。

これまでの古い人は捨てます。それは人を欺く情欲に突き動かされていました。情欲は人を欺きます。自分は満たされると約束は与えますが、偽りに満ちています。そして、人はどんどん腐敗していきます。それを脱ぎ捨てるのです。新しい人を着るために、古い人を脱ぎ捨てます。

2A 身に着けるべきこと 25-32

そして 25 節から、その具体的な歩みを、パウロは列挙していきます。古い人を捨て、新しい人を着るとはどういうことかが、良く分かります。

1B 新しい人 25-29

²⁵ ですから、あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。私たちは互いに、からだの一部分なのです。

一つ目は、偽りについてです。今、真理に基づく義と聖とパウロは言っていました。イエスご自身のうちに真理があり、この方は真理です。ですから、新しい人の特徴はまず、真理です。モーセの律法にも、「偽りの証言をしてはならない」と戒められています(20:16)。けれども、神の民の間にも、偽りが入ってきます。パウロは、ゼカリヤの預言から、この言葉を引用しています(8:16-17)。バビロンからエルサレムに帰還した民の間で、対立が起こり、いつの間にか互いに真実に愛するのではなく、偽りが入ってきました。同じ神の民でそのようなことがあってはならない、平和と真実の実を結びなさいということを教えています。それでパウロは、教会においても同じで、「**私たちは互いに、からだの一部分なのです。**」と言っています。偽ることは、キリストのからだを傷つけることで、自分自身を傷つけることでもあるのです。

世の中では、「嘘も方便」という言葉があるように、嘘をつくことは一つの知恵だとさえ思われています。キリスト者であっても、同じような価値観を持ち込んで、仲間に嘘をつくことがあります。あるいは、言葉上はあからさまな嘘はついていないのかもしれませんが、上手に言わないことによって自分を他者に隠していくことをします。そうではありません、愛の結びつきの中で自分の弱さ、時には自分の罪さえ告白するような、受け入れと憐れみの御霊が私たちの間に留まっておられるなら、それだけ真実を語る事ができるのです。

²⁶ 怒っても、罪を犯してはなりません。憤ったままで日が暮れるようであってははいけません。²⁷ 悪魔に機会を与えないようにしなさい。

二つ目は、怒ることです。これも旧約聖書から、詩篇から来ているものです。「怒りに震えよ。しかし罪を犯すな。床の上で心に語り、そして鎮まれ。(共同訳 4:4)」怒ることと「罪を犯す」ことを区別しています。怒りそのものは、罪ではないからです。

神ご自身が怒りを持っておられました。イエス様も、神の宮で商売をしている姿をご覧になって、怒られました。私たちは悪に対して怒らなければ、それはおかしいです。しかし、ヤコブ書には、「1:19-20 怒るのに遅くありなさい。人の怒りは神の義を実現しないのです。」とあります。私たちは、神ゆえに、キリストゆえに怒っているのではなく、自分の正しさ、すなわちプライドが傷つけられて

怒っていることが多々あります。ですから、怒りは神に任せるのです。

ネヘミヤは、ユダヤ人たちの間で貧富の差が出来て、貸し借りの関係ができ、ついには、仲間のユダヤ人を奴隷にしている者たちさえいました。それにネヘミヤは、「激しく腹を立てた。」とあります。しかし、「私は十分考えたうえで、有力者たちや代表者たちを非難して言った。」と続きます(5:6-7)。彼は怒り散らすのではなく、冷静になって、神の義に基づいてどのように対処すればよいかを、知恵を用いたのです。「怒っても、罪を犯してはなりません」の良い例です。

そして興味深いことに、「憤ったままで日が暮れるようであってははいけません。」とあります。ユダヤ人は日没を一日の始まりとしています。一日を越して憤ったままにしてはいけないと言います。それはなぜか？次の「悪魔に機会を与えないようにしなさい。」という言葉につながりますが、その憤りが床に入っているうちに苦みへと変えられ、悪魔がその苦みを弄ぶ機会を作ってしまうからです。「ヘブ 12:15 だれも神の恵みから落ちないように、また、苦い根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。」

聖書には、ヤコブに怒ったエサウの子孫、エドム人はいつまでもヤコブの子孫、イスラエルに怒り、根に持ち、復讐心をいつまでも抱き、オバデヤ書やエゼキエル 35 章で、彼らが滅ぼされる預言があります。ダビデの息子アブサロムが、妹のタマルがダビデの息子アムノンに凌辱されたことを怒り、それをいつまでも根にもって、ついにエルサレムを父から奪い取り、父と戦って、その將軍ヨアブに殺されました。

サタンは、私たちに巧妙に罠をしかけてきます。「Ⅱコリ 2:11 それは、私たちがサタンに乗じられないようにするためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。」サタンには策略があります。そして、私たちが喰い尽くそうと獅子のようにうろついています(Ⅰペテロ)。ですから、私たちは絶えず、サタンの策略はどこにあるかを見分けなければいけません。

²⁸ 盗みをしている者は、もう盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい。

盗みについてです。モーセの律法に書かれていることすし、隣人を愛するならば、盗むことはありません。けれども、それも一般社会では行われていたようです。コリント人への第一の手紙では、神の国に入れられない正しくない者として、「盗む者」が列挙されています(6:10)。教会の中で、だまし取っている者たちがいたことも、パウロは書いています。まさか、そんなこと教会で起こっていたの？と思うかもしれませんが、私が、ある聖書学校に見学に行った時に、聖書を忘れてしまいました。そうしたら、後日、聖書カバーが売られていたか、展示されていたそうです。聖書そのものはなくなっています。聖書を学んで、それを実践する人々が集まっているところなのに、盗みが起こっ

ていたのです。

ここでも、古い人は捨てて、新しい人を着なさいの勧めがあります。盗むことをやめるだけでなく、むしろ、困っている人に分け与えるのです。困っている人に分け与えるために、自分の手で正しい仕事をして、労苦して働きます。「I テサ 4:11 また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉としなさい。」ギリシア・ローマの文化ですと、働くことは奨励されていましたが、貧しい人々、多くは下の階級の人々ですね、そういった人々のために働くのは、不名誉なこととされていました。また、ローマの自由人は、自分の手を汚して働くことも避けていました。パウロは、そのどちらも行いなさいと言っていますね。パウロ自身が、天幕作りをしていました。キリスト者が、手を汚すような労働をすることは、不名誉どころか、とても名誉あることなのだということを知ったらいいと思います。一攫千金を狙うような、手を汚さない仕事ではなく、着実に収入の入る、地道な仕事、実直な仕事です。しかも、それは自分の生活費のためだけでなく、困っている人々を助けるためでもあります。

²⁹ 悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。むしろ、必要なときに、人の成長に役立つことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい。

悪いことばが、いかに害毒であるか聖書は数多く語っています。「詩 5:9 彼らの口には真実がなく心にあるのは破壊です。彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌でへつらうのです。」「ヤコブ 3:6 舌は火です。不義の世界です。舌は私たちの諸器官の中にあつてからだ全体を汚し、人生の車輪を燃やして、ゲヘナの火によって焼かれます。」神を知らないこの世においては、悪い言葉が当たり前とされていました。陰口も当たり前でした。しかし、それは古い人で、捨てなければいけません。

そして黙っていればよい、ということではありません。新し人を着るのです。「むしろ、必要なときに、人の成長に役立つことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい。」言葉は人を倒す道具ともなりますが、反対に人を立たせる力ともなります。励ましと勧め、慰めの言葉は人を立たせることができます。そして、聞く人は恵みを受けます。ですから、御霊の賜物を求めるとよいでしょう、言葉による賜物、知恵の言葉、知識の言葉、預言の言葉があります。

2B 聖霊にある優しさ 30-32

ここまでパウロが話していき、その根底には、「霊と心において新しくされ続けなさい」という考えがありました(23 節)。御霊の導きがあつて、これらの新しい歩みができます。その御霊を、明かに傷つけるようなことはやめなさい、というのが次の勧めです。怒り、悪いことば触れていましたが、そうしたことは捨て去らなさいと、あなたがたの内に住まわれる聖霊を悲しませることとなります、という警告を次に行います。

30a 神の聖霊を悲しませてはいけません。

パウロは、御霊のことをここで敢えて、「神の聖霊」と呼んでいます。なぜなら、神の御霊であり、この方は聖なる方だからです。聖なる方にこれから見ていく怒りや罵りは、全くそぐわないものです。主は、荒野の旅でモーセが、岩を二度打ったことについて、「イスラエルの子らの見ている前でわたしが聖であることを現さなかった。」と言われました(民数 20:12)。聖なるご性質と相反するものなのです。

そして、聖霊は人格を持っておられる方です。エネルギーではありません。感情を持っておられ、悲しませることができるのです。私たちが怒り散らしたり、罵ったりしたら、人々の気分を著しく害しますし、自分自身もやるせない気持ちになるかもしれません。キリスト者の場合は、聖霊ご自身を悲しませていることを知るべきです。

30b あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。

これは1章でパウロが聖霊の働きについて説明した部分です。神の贖いが後に来ます。主が戻って来られる時に、私たちの体は栄光に体に変えられます。体も贖われるのです。けれども、その日までは聖霊が私たちの証印となってくださり、私たちが確かに神の所有の民になっていることを確認してください。そのような働きの中で、聖霊の実である愛を結ぶのです。

31 無慈悲、憤り、怒り、怒号、ののしりなどを、一切の悪意とともに、すべて捨て去りなさい。

これらもこの世には、はびこっています。今は終わりの日で、ますます、怒りと憎しみが文化にさえなってしまいました。「マタ 24:10-12 そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。11 また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。12 不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。」しかし、キリスト者はこれとは無縁の存在でなければいけません。」陰謀論的な考え、白黒をはっきり分け二分していくような考えが流行り、自分と考えが合わない人たちは、悪魔の支配の下にいると断定します。それに伴って、暴力も増えています。日本では、安倍元首相がテロの凶弾に倒れました。つい昨日、アメリカではペロシ下院議長の夫が、自宅で、陰謀論に毒されていた男からハンマーで打たれて、頭蓋骨を折るという重傷を負いました。パウロが、ピリピ人への手紙で言いました、「ピリピ 4:5 あなたがたの寛容な心が、すべての人に知られるようにしなさい。主は近いのです。」主が近いのだからこそ、寛容な心が知られるようにしなさいと、パウロは勧めています。偏狭になり、憎しみが増えている時だからこそ、主が、すべて悔い改める者たちを受け入れられるという寛容さをもって、人々に接していきなさいということです。

この初めの、「無慈悲」ですが、ギリシア語は「苦み」の意味です。苦みがあり、怒り、怒号、罵り

と続きます。日本にも、どこの国にもありますが、恨みの文化があります。自分が一度、悪いことをされたら、それをいつまでも恨みに抱くということです。私たちは、キリストにある者として、この苦みの文化を、はっきりと悪意であるとみなさなければいけません。そして、すべて捨て去るのです。

³² 互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださったのです。

これこそが、新しい人を身に着けること、キリストにある真理に従うことです。キリスト者の間には、赦しの文化があります。それは、悪いことをそのままにしておくということではありません。赦しについては、いろいろな意味で突出した考えを持っていると言ってよいでしょう。積極果敢に、赦していくのです。その赦しに基づいて、親切にして、優しい心を抱きます。

「神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださった」という恵みがあります。神との恵みの交わりこそが、私たちが他者に大らかになれる源です。マタイ 18 章 23 節以降に、借金をしている僕の姿が出てきます。一万タラントの借金をしています。一タラントが六千デナリで、デナリは一日の労賃に相当します。かりに一日一万円の労賃だとします。一タラントで六千万円であり、一万タラントですから一兆円です。つまり、これはそれだけの罪を犯したのだということです。神に返済できるような罪ではないということです。それで王は帳消しにしてくれました。ところが、しもべに借りのある他のしもべは、百デナリでした。ところが彼はそれを赦さず、なんと牢に投げ入れました。それで王は怒り、彼を全額返済するまで牢屋に入れたのです。

パウロがなぜ、冒頭 17 節で、「主にあって厳かに勧めます。」と言ったのかが理解できます。神の恵みに触れることは、厳かなことです。それに基づく赦しの歩みが、キリスト者の新しい性質なのだということです。